

研究テーマ「 協同的な学び合いを通して、自分の考えを伝え合い、共に高め合える  
生徒の育成 」

倉吉市立 東中学校

スーパーバイザー：中京大学 国際教養学部 杉江修治 教授

1 はじめに

本校は、平成28年度に創立69年を迎えた鳥取県中部の公立中学校である。現在本校に在校している生徒(男子127名、女子129名 全校生徒256名)のほとんどは倉吉市内の小学校出身者で、校区内4小学校から入学してくる。

一昨年度から杉江修治スーパーバイザー(SV)のご指導の下、「協同的な学び合い」をキーワードに全教科で研究を進めてきている。協同学習の基本理念を取り入れ、本校の学校教育目標である「自ら学び、判断し、行動する生徒の育成」を目指して、取り組みを進めている。

2 研究のねらい

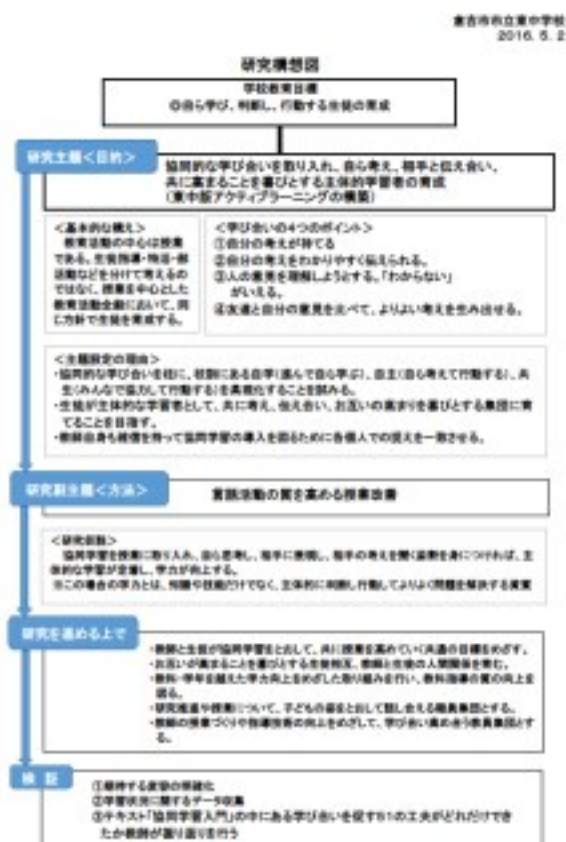
- ・協同的な学び合いを柱に、校訓にある自学(進んで自ら学ぶ)、自主(自ら考えて行動する)、共生(みんなで協力して行動する)を具現化することを試みる。
- ・生徒が主体的な学習者として、共に考え、伝え合い、お互いの高まりを喜びとする集団に育てることを目指す。
- ・教師自身も確信を持って協同学習の導入を図るために各個人での捉えを一致させる。

3 基本的な構え

教育活動の中心は授業である。生徒指導・特活・部活動などを分けて考えるのではなく、授業を中心とした教育活動全般において、同じ方針で生徒を育成する。

4 研究仮説

協同学習を授業に取り入れ、自ら思考し、相手に表現し、相手の考えを聞く姿勢を身につければ、主体的な学習が定着し、学力が向上する。



※この場合の学力とは、知識や技能だけでなく、主体的に判断し行動してよりよく問題を解決する資質や能力のことである。

## 5 研究を進める上で

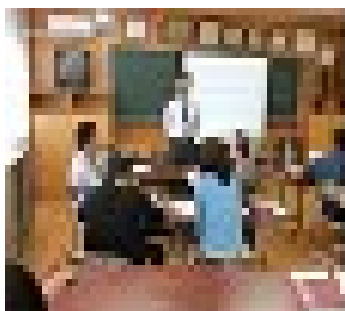
- ・教師と生徒が協同学習をとおして、共に授業を高めていく共通の目標を目指す。
- ・お互いが高まることを喜びとする生徒相互、教師と生徒の人間関係を育む。
- ・教科・学年を越えた学力向上をめざした取り組みを行い、教科指導の質の向上を図る。
- ・研究推進や授業について、子どもの姿をとおして話し合える職員集団とする。
- ・教師の授業づくりや指導技術の向上をめざして、学び合い高め合う教員集団とする。

## 6 研究内容

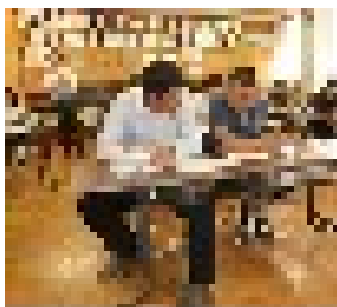
### (1) 授業研究会の実施

#### ① 5月 理論研修会

中部教育局の河田指導主事を招いて、本校が一昨年度から取り組んでいる協同学習とアクティブ・ラーニングとの共通点、相違点について理論研修を行った。今年度、校長以下、多くの教員が転入してくる中で、杉江SVに指導・助言をいただく前にこれまでの取り組みの成果と問題点等の共有化を図ることができた。



河田指導主事による講義



真剣に学べばこの距離感になる

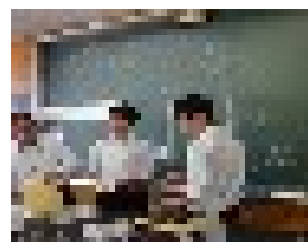


協同的な学習とアクティブ・ラーニングとの関係性を理解する

#### ② 6月 杉江SVを招聘、第1回校内授業研究会を開催

協同学習のポイントについての指導を受ける。杉江SVには可能限りの授業を見ていただき、そのすべてに指導・助言をいただいた。以下に主な指導・助言を示す。

- ・「どうやって学ばせるか」という意識で授業をする。子供が主体である。アクティブ・ラーニングの構築は技法だけでなく根本的な授業に対する考え方の変化を目指す。とよい。
- ・どんな子供に育てたいかのきちんとした共通理解が必要である。一人ひとりが精一杯伸びる学びを。 ※協同学習＝グループ学習ではない
- ・学級が協同の単位。なかま全体（クラス全体）が高まる。「助け合い」ではなく「高め合い」。



授業を終えても学びは続く。黒板に集まって教え合いをしていた。

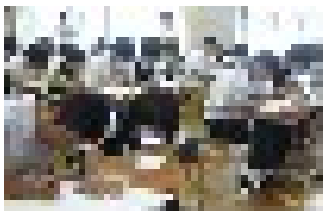
③ 10月 校内研修会に杉江鳥取県SVを招聘、第2回校内授業研究会を開催

1回目の授業研究会から3か月後、授業改善の進捗具合を中心に可能な限りの授業を見ていただく。研究授業は道徳で実施した。以下に主な指導・助言を示す。

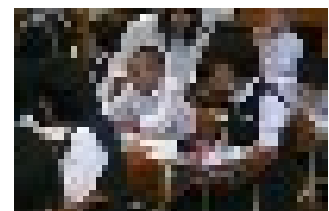
- ・協同的な学びは基本的には学力論である。子供に本物の学力をつける。できるだけアクティブにはたらく場面を設ける。学習内容を深め、広げることに視点を置いておく、学び合いを深め合いにつなげる。どうやったら深まるかの仕掛けづくりを考えていただきたい。
- ・子供が主体的に動く仕掛けづくりを。
- ・学びの流れの説明は学びの構えづくりになる。
- ・個人思考の場面で先生が黙ってられない。本当につまずいている子だけにかかわる。時には話しかけるのを我慢することも必要。
- ・みんなで課題などを共有するときは先生に向かってのやりとりではなく、話す方も友達に向かってきちんと話さないと理解されないということをわからせる。



授業研究会における杉江修治SVの指導・助言



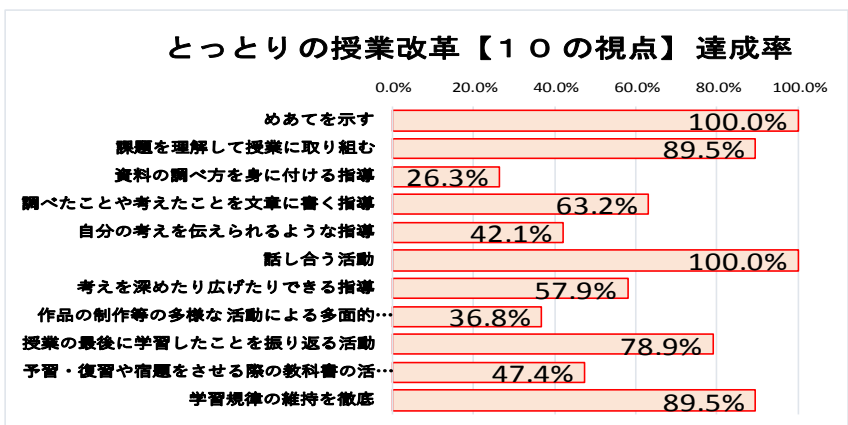
徹底した個人思考をもとに横につながり、高め合う授業を目指す。(クラス全員が高まることを、全員の目標にしているか)【授業を構築する視点の明確化より】



7 研究のまとめ (成果と課題)

全校生徒に行ったアンケートによると「私は、進んで学習に参加しようとしている」87.1%、「授業をわかりやすくしたり考えを深めるような工夫をしている」82.0%となっており、東中が杉江SVの指導・助言により、授業改善を行った結果、協同的な学びの成果が表れたことが伺える。

協同的な学びの4つのポイント「①自分の考えが持てる。②自分の考えをわかりやすく伝えられる。③人の意見を理解しようとする。「わからない」がいえる。④友達と自分の意見を比べて、より良い考えを生み出せる。」のうち④を教師がどう評価していくか。ただの活動ありきでは評価のない指導で終わる。どう変容したかを見るのが教師のおこなう評価(みとり)であるという認識を共有化する必要がある。

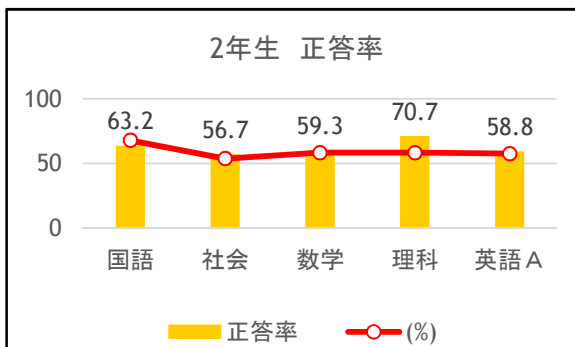
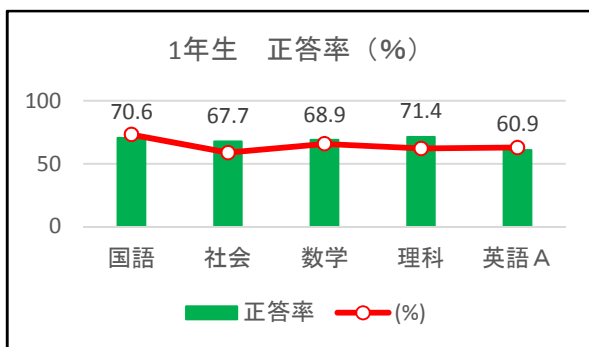


現在、東中版アクティブ・ラーニングを構築するために全教科共通の取り組みとして、学習の「めあて」と「学びの手順」を黒板に示すようにしている。めあてについてはさらに中身を練る必要があり、「～しよう」という書き方ではなく、今日の授業が終わったときにどんな力がついているのか、理解ができるものにした。

**東中版アクティブ・ラーニング～学びのスタンダード～**  
**めあてを示す（つきたい力）→学びの手順を示す（学びの構えづくり）→めあてに対する振り返りを行う（自己評価カードによる変容のみとり）**

CRT検査の結果（12月下旬1, 2年生で実施）

受検教科平均で見ると、2学年とも全国平均とほぼ同程度で、おおむね良好な状況である。特に1年生に日ごろの指導の成果が表れている。



## 8 おわりに

「協同学習を基本理念とするアクティブ・ラーニングの視点からの深い学び」とは、教科としての目標を達成することが第一であると考えている。「教科のねらいを達成できているか」「主体的にはなるが『深い学び』になるためには、その学びが本当に意味のあるものなのか」、全教科で意識したい点である。

今後、本校が力を入れて研究を進めるところを「深い学び」にシフトしていくべきではないかと考えている。本当の意味での学力、教科の力をつけていきたい。そして、協同学習においては生活の場面も大事である。「掃除、給食での協力体制や各クラスの学級目標の達成度はどうなっているか」、学校として目指す姿を基本に学級目標を定期的に振り返り、授業以外の生活の場面も見直し、改善を図りたい。授業が勝負だが、東中版アクティブ・ラーニングの基盤は学級経営にあると考えている。お互いが高まることを喜びとする生徒相互、教師と生徒の人間関係を育んでいきたい。

今年度はスーパーバイザーとして杉江教授を招聘し、協同学習を基本理念として東中版アクティブ・ラーニングの構築を目指してきた。今後もお互いが学び合い、高まり合うことを喜びとする「学びの集団」づくりを継続し、授業改善を進めていきたいと考えている。